東京学芸大学教育実践研究　第18集　pp. 83-91，2022

知的障害のある中高生の過剰適応に影響を及ぼす個人要因の探索的検討

杉山　友菜*・橋本　創一**・日下　虎太朗***・竹達　健顕***
田口　禎子****・三浦　巧也*****・堂山　亞希******

（2021年11月25日受理）

SUGIYAMA, Y., HASHIMOTO, S., KUSAKA, K., TAKETATSU, T., TAGUCTI, T., MIURA, T. and DOUYAMA, A.; An Exploratory Study of Individual Factors Affecting Over adaptation in Junior and Senior High School Students with Intellectual Disabilities　ISSN 1349-9580

This study was designed to exploratively examine individual factors affecting over adaptation in junior and high school students with intellectual disabilities. We hypothesized three individual factors contributing to over adaptation based on clinical reports of over adaptation among children and adults with intellectual disabilities: “difficulties in requesting assistance,” “difficulties in self-understanding,” and “characteristics of disabilities, especially autism spectrum disorder”. We also examined the psychological causes of over adaptation. A questionnaire survey was conducted with junior and senior high school teachers in a special needs school for the mentally disabled. The results indicated that equal numbers of over adaptation students were good or had difficulties in requesting help. Moreover, approximately half the students had self-understanding problems. Furthermore, the characteristics of their disability influenced over adaptation in over 60% of students, suggesting the possible impact of autism spectrum disorder characteristics, such as fixation, limited communication, intellectual disability, and limited conceptual adaptive functioning. The limitations of this study include examining only objective over adaptation because the study only surveyed teachers without examining environmental factors, which remains an issue for the future.

KEY WORDS : Over-adaptation, Intellectual disability, Junior and senior high school students

* *Gradutate School of Education, Tokyo Gakugei University*
** *Center for the Research and Support of Educational Practice, Tokyo Gakugei University*
*** *The United Graduate School of Education, Tokyo Gakugei University*
**** *Komazawa Women’s College*
***** *Tokyo University of Agriculture and Technology*
****** *Mejiro University*

* 東京学芸大学大学院　教育学研究科
** 東京学芸大学　特別支援教育・教育臨床サポートセンター
*** 東京学芸大学大学院　連合学校教育学研究科
**** 駒沢女子短期大学
***** 東京農工大学
****** 目白大学

1．はじめに

近年，メンタルヘルスや不適応の観点から，知的障害や自閉スペクトラム症といった発達障害のある子ども・成人における過剰適応に着目する必要性が指摘されている。特に自閉スペクトラム症の過剰適応は臨床事例報告が多数挙げられてきており，千田・岡田（2021）[6] はわが国における自閉スペクトラム症の過剰適応について報告した文献を概観している。自閉スペクトラム症の過剰適応に関する臨床事例の報告は精神科領域から就労支援の領域にまでわたる。

精神科領域においては，横田ら（2018）[7] や横田・千田・岡田（2011）[8] が学校や就労の場での過剰適応により，精神疾患を発症した事例を報告している。横田ら（2018）[7] では，自閉スペクトラム症の過剰適応事例の考察として，「ASDの過剰適応の問題は，困っていることやわからないことを周囲へ伝えられないコミュニケーション能力の弱さ，行動の枠組みを組み立てられない実行機能の弱さ，与えられた枠組みをきちんとこなさないと不安になるこだわり，失敗や叱責などへの過度の恐怖などが根底にあると考えられる」と述べられている。

また，就労支援の領域においては，杉山・高橋（1994）[5] が就労に挫折した自閉症青年のフォローアップを行った13事例について報告しており，就労挫折の要因を３類型した結果，過剰適応型の挫折が７事例と最も多かったことを報告している。同論文において，「これらの自閉症例では，就労場面において無理を重ねていることに周囲が気付かぬままに経過し，無理が限界に達したときに当人にも明確に自覚されないまま，強迫，身体的不定愁訴，抑うつ，パニック等が頻繁に生じるようになり，やがて出勤の忌避，家庭内暴力，自傷，家出など，追い詰められて生じる一連の行動化がみられるようになる」と考察されている。

また，米田（2011）[9] はアスペルガー障害のある者の不適応についてまとめる中で，過剰適応によって燃え尽きが起こるメカニズムの一因に，自己モニターの障害を挙げており，「どの程度の労働でどの程度疲労するか，どの程度疲労したらどの程度回復に時間が必要か，というようなことについて，アスペルガー者は自分では把握できないことが多い」と指摘している。

一方，知的障害のみの診断である子ども・成人の臨床事例は，横田・千田・岡田（2011）[8] の中で取り上げられているものの，自閉スペクトラム症児者と比較すると注目がなされていない現状がある。しかし，知的障害児者の急激退行に関する菅野（2005）[2] や西郷・橋本（2014）[4] の研究では，急激退行の背景要因の一つに過剰適応が挙げられており，生活や仕事の場で頑張りすぎることがきっかけとなって青年期・成人期に精神疾患を発症するケースもあることが指摘されている。このことからも，自閉スペクトラム症がない場合でも，知的障害児者が過剰適応を起こし，メンタルヘルスの不調につながりうることが考えられる。

以上のような臨床報告を踏まえ，知的障害児者（自閉スペクトラム症が併発しているケースも含む）が過剰適応を起こす要因について，以下の３点が特に影響を与えているのではないかと仮説を立てた。

一つ目が，援助要請の困難である。困ったことや分からないことがある状況において，周囲の人に援助を求めることが難しい場合，過剰適応が起こりやすいと考えられる。

二つ目が，自己理解の課題である。無理が限界に達した場合に本人が自覚しにくいことや，自分自身の能力や耐性・こなすことのできるタスク等について把握しにくいといった，自己理解に関する課題がある場合，過剰適応が起こりやすいと考えられる。

三つ目が，自閉スペクトラム症を中心とした障害特性である。例えば，きちんとこなしたいといったこだわりや曖昧の苦手さなどから完璧にこなそうとしてしまった場合，過剰適応が起こりやすいと考えられる。

知的障害児者の過剰適応の研究は，臨床報告とそれに対する考察にとどまっている現状であり，今後量的な研究がなされ，知的障害児者における過剰適応の要因や症状を整理していく必要がある。

そこで本研究では，知的障害のある中高生を対象に，過剰適応に影響を及ぼす要因について探索的に検討することを目的とする。なお，過剰適応を理解するにあたって環境の要因について考慮する必要性は言うまでもないが，それぞれの生徒が置かれている環境は非常に複雑・多様であり，取り扱うことが難しいと考え，本研究では個人の要因のみに着目した。また，上記の仮説的要因に加え，本研究では臨床事例の報告や定型発達児者を対象とした先行研究（石津，2006；桑山，2003等）[1] [3] を基に，過剰適応を生起させる心理についても検討する。さらに，自閉スペクトラム症の有無による群間比較をすることで，自閉スペクトラム症のある生徒とない生徒の共通点・差異点についても検討する。

2．方法

2．1　対象者

全国にある知的障害特別支援学校の中学部624校・高等部715校，計1339の教員を対象に質問紙調査を行った。

なお，各校回答者は１名とし，その選出は各校に一任した。返答のあった，中学部教員288名（教員歴平均14.5年（SD=9.3））・高等部教員334名（教員歴平均15.1年（SD=9.2），計622名を分析対象とした（回答率46.4%）。

２．２　調査手続き

2020年７月に，対象とした特別支援学校に質問紙を郵送し，各教員が質問項目に回答した後に直接返送してもらった。

なお，倫理的な配慮として，集めたデータは統計処理をするため学校名や個人が公表されることは一切ないこと，結果については学術的な目的以外に使用しないことを質問紙に明示し承諾を得た。

２．３　調査内容

本研究における過剰適応の定義：場面や状況にふさわしい（うまくあてはまる）ように行動しようと，必要以上に努力すること

本研究では，過剰適応を上記のように定義し，質問紙に明記した。そして，現在または過去に担当する（した）過剰適応を示す生徒を１名取り上げてもらい，以下の回答を求めた。

(1) 過剰適応を示す生徒の基本情報

学年について「中１」「中２」「中３」「高１」「高２」「高３」「その他」，知能指数について「IQ86以上」「IQ85～71」「IQ70～51」「IQ50～36」「IQ35～21」「IQ20以下」「その他」，障害種について「ASD」「ADHD」「LD」「ダウン症」「その他」からそれぞれ当てはまるものを選んでもらった。なお，障害種については複数回答可とした。

(2) 援助要請について

援助要請の程度について「できる」「時々できる」「どちらともいえない」「あまりできない」「できない」「その他」から当てはまるものを選んでもらった。

(3) 自己理解について

自己理解の程度について，「できている」「おおよそできている」「どちらともいえない」「あまりできていない」「できていない」「その他」から当てはまるものを選んでもらった。

(4) 障害特性の影響について

障害特性の影響について，「影響を与えている」「影響を少し与えている」「どちらともいえない」「影響はあまり与えていない」「影響は与えていない」「その他」から当てはまるものを選んでもらった。また，「影響を与えている」「影響を少し与えている」と回答した場合，具体的に影響を与えている障害特性について，自由記述により回答してもらった。

(5) 過剰適応を生起させる心理について

「理想の自分や達成目標を高く持ち，こだわってしまう」「できないこと，失敗に対して強い負の印象を持ち，それらを許さない」「他者の役に立ちたい，相手のために何かしてあげたいという気持ちがある（サービス精神）」「他者からの期待にこたえたい，または他者から期待されていると思い込む気持ちが強い（他者から求められることへの敏感さ）」「他者から認めてもらいたいという気持ちがある（他者から評価されることへの敏感さ）」「褒美（物質的なもの）を求める気持ちがある」「その他」から生徒の心理に近いと考えられるものを複数選択可で選んでもらった。

２．４　分析方法

数値記入や選択式の回答は単純統計し，頻度や割合の算出を行った。また，自由記述の回答は著者と指導教員でKJ法によってカテゴリー化し統計を行った。また，自閉スペクトラム症のある生徒とない生徒の２群（以下，ASD群・非ASD群）に分け，上記結果についてJs-STAR_XRを用いてχ^2検定・残差分析を行った。

３．結果

事例調査で取り上げられた過剰適応を示す生徒は中学部135名，高等部196名の計331名の生徒であった。

３．１　過剰適応を示す生徒の基本情報

まず，学年について，中学部１年43名（13.0%），２年36名（10.9%），３年52名（15.7%），高等部１年66名（19.9%），２年60名（18.1%），３年65名（19.6%），その他・未記入９名（2.7%）であった。続いて，知的障害の程度は，なし・境界域58名（17.5%），軽度157名（47.4%），中度59名（17.8%），重度12名（3.6%），その他・不明・未記入45名（13.6%）であった。そして，障害種（疑い含む）は，ASD162名（48.9%），ADHD53名（16.0%），LD９名（2.7%），ダウン症９名（2.7%），その他30名（9.1%）であった（複数回答可）。

３．２　援助要請について

回答者数は327名（98.8%）であった。

援助要請が，「できる」27名（8.3%），「時々できる」127名（38.8%），「どちらともいえない」30名（9.2%），「あまりできない」118名（36.1%），「できない」24名（7.3%），「その他」１名（0.3%）であった（図１）。

また，ASDの有無により各項目（その他除く）が占め

る割合が異なるか，χ^2検定を行った結果，いずれの項目でも有意差はみられなかった（表1）。

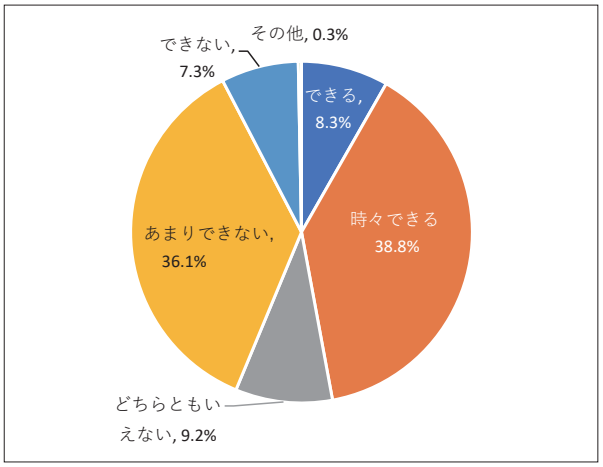

図1　援助要請（N=327）

3．3　自己理解について

回答者数は324名（97.9%）であった。

自己理解が，「できている」5名（1.5%），「おおよそできている」85名（26.2%），「どちらともいえない」75名（23.1%），「あまりできていない」124名（38.3%），「できていない」33名（10.2%），「その他」2名（0.6%）であった（図2）。

また，ASDの有無により各項目（その他除く）が占める割合が異なるか，χ^2検定を行った結果，「できていない」（χ^2（1）=7.410，p<.01）で有意差がみられた。そのほかの項目では有意差はみられなかった（表2）。

有意な差がみられた項目について，BH法で残差分析を行ったところ，「できていない」はASD群が期待値よりも実測値の方が有意に大きく，非ASD群が期待値よりも実測値の方が有意に小さい（いずれもp<.01）という結果だった。

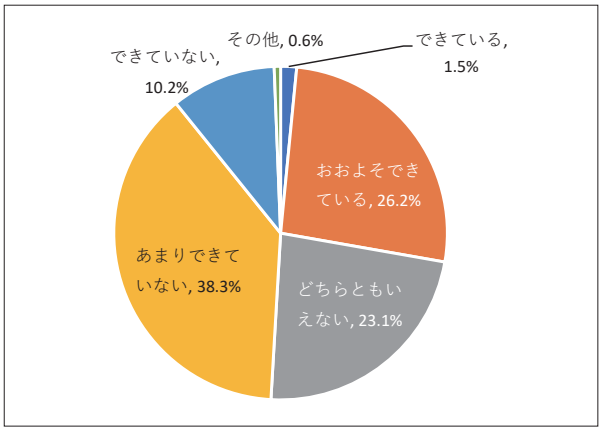

図2　自己理解（N=324）

3．4　障害特性の影響

回答者数は324名（97.9%）であった。

障害特性が影響を，「与えている」94名（29.0%），「少し与えている」113名（34.9%），「どちらともいえない」96名（29.6%），「あまり与えていない」19名（5.9%），「与えていない」2名（0.6%），「その他」0名（0.0%）であった（図3）。

また，ASDの有無により各項目（その他除く）が占める割合が異なるか，χ^2検定を行った結果，「与えている」（χ^2（1）=19.599，p<.01），「どちらともいえない」（χ^2（1）=7.045，p<.01），で有意差がみられた。そのほかの項目では有意差はみられなかった（表3）。

有意な差がみられた項目について，BH法で残差分析を行ったところ，「与えている」はASD群が期待値よりも実測値の方が有意に大きく，非ASD群が期待値よりも実測値の方が有意に小さい（いずれもp<.01），「どちらともいえない」はASD群が期待値よりも実測値の方が有意に小さく，非ASD群が期待値よりも実測値の方が有意に大きい（いずれもp<.01）という結果だった。

また，上記質問で，「与えている」「少し与えている」と回答した教員に対して，「影響を与えていた具体的な障害特性」について自由記述により回答してもらった。回答者数は203名（61.3%）であった。自由記述の回答をKJ法により分類したところ，大カテゴリーは『ASD特性』（156件），『ASD副次的・関連的特性』（116件），『その他の特性』（48件）の3つとなった（表4）。

『ASD特性』は，「固執」（87件），「対人・コミュニケーション」（43件），「感覚・情緒」（26件）の中カテゴリーに分類された。『ASD副次的・関連的特性』は，「適応機能（概念的）」（44件），「二次的問題」（36件），「実行機能」（29件），「行動」（7件）の中カテゴリーに分類された。『その他の特性』は，「性格や気質・機能」（33件），「環境」（15件）の中カテゴリーに分類された（表4）。

また，ASDの有無により，中カテゴリーの記述数に違いがあるかを検討した。ASD群では「固執」が最も多く69件（37.7%），次いで「対人・コミュニケーション」24件（13.1%），「感覚・情緒」と「実行機能」19件（10.4%）であった（図4）。非ASD群は「適応機能（概念的）」が最も多く27件（19.7%），次いで「二次的障害」22件（16.1%），「性格や気質・機能」21件（15.3%）であった（図5）

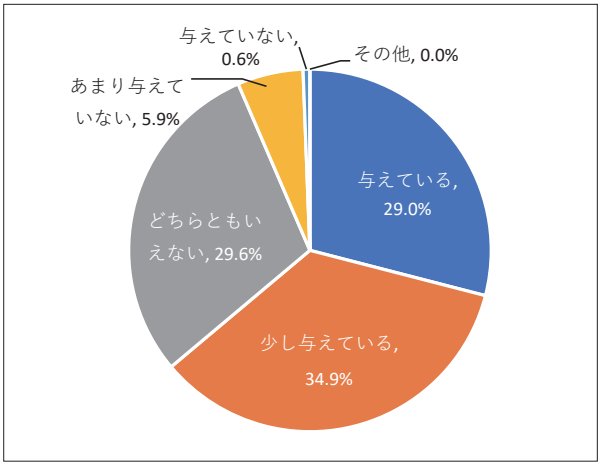

図３　障害特性の影響（N=324）

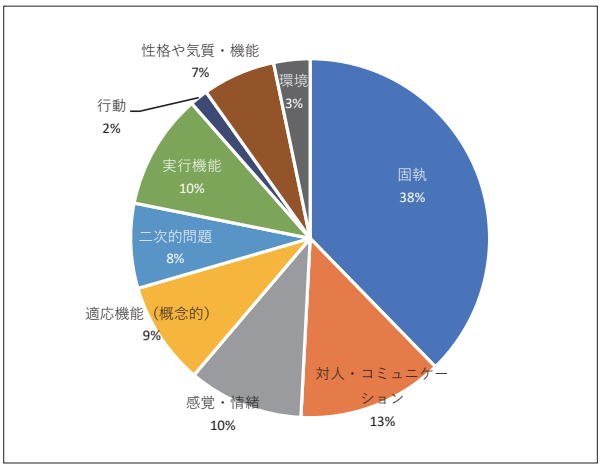

図４　障害特性の具体的内容（ASD群）

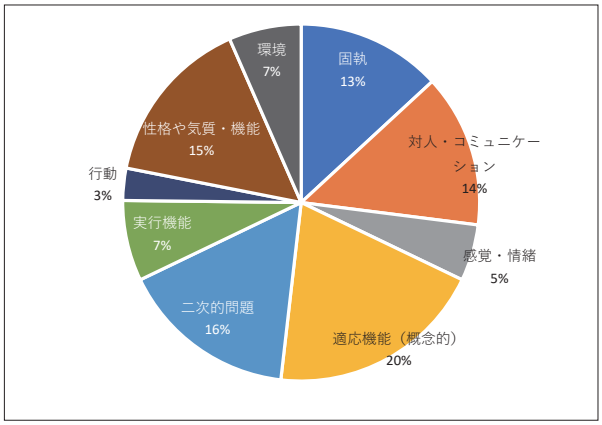

図５　障害特性の具体的内容（非ASD群）

３．５　過剰適応を生起させる心理について（複数回答可）

回答者数は330名（99.7%）であった。

「理想の自分や達成目標を高く持ち，こだわってしまう」156名（47.3%），「できないこと，失敗に対して強い負の印象を持ち，それらを許さない」185名（56.1%），「他者の役に立ちたい，相手のために何かしてあげたいという気持ちがある（サービス精神）」95名（28.8%），「他者からの期待にこたえたい，または他者から期待されていると思い込む気持ちが強い（他者から求められることへの敏感さ）」134名（40.6%），「他者から認めてもらいたいという気持ちがある（他者から評価されることへの敏感さ）」174名（52.7%），「褒美（物質的なもの）を求める気持ちがある」12名（3.6%），「その他」41名（12.4%）であった（図６）。

また，ASDの有無により各項目（その他除く）が占める割合が異なるか，χ^2検定を行った結果，「できないこと，失敗に対して強い負の印象を持ち，それらを許さない」（$\chi^2(1)=11.439$，$p<.01$），「他者から認めてもらいたいという気持ちがある（他者から評価されることへの敏感さ）」（$\chi^2(1)=3.426$，$.05<p<.10$）で有意差がみられた。そのほかの項目では有意差はみられなかった（表５）。

有意な差がみられた項目について，BH法で残差分析を行ったところ，「できないこと，失敗に対して強い負の印象を持ち，それらを許さない」はASD群が期待値よりも実測値の方が有意に大きく，非ASD群が期待値よりも実測値の方が有意に小さい（いずれも$p<.01$），「他者から認めてもらいたいという気持ちがある（他者から評価されることへの敏感さ）」はASD群が期待値よりも実測値の方が有意に小さく，非ASD群が期待値よりも実測値の方が有意に大きい（いずれも$p<.05$）という結果だった。

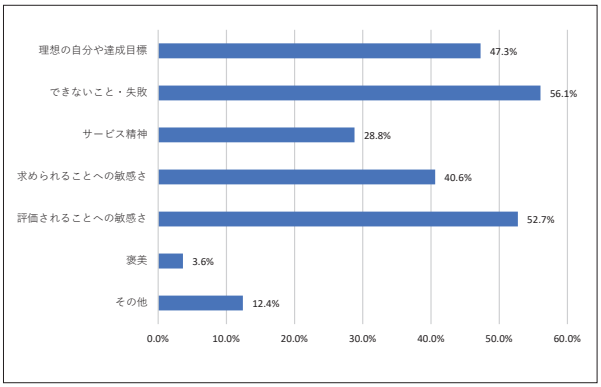

図６　過剰適応を生起させる心理（N=330）

４．考察

本研究では，知的障害のある中学生・高校生のうち過剰適応を示す生徒の，個人要因と仮定した援助要請，自己理解，障害特性の影響および過剰適応を生起させる心理について，担当教員に調査することにより探索的に検討した。

表１　ASDの有無ごとの援助要請

	できる	時々できる	どちらともいえない	あまりできない	できない	その他
ASD群（N＝159）	15（9.4%）	58（36.5%）	11（6.9%）	60（37.7%）	15（9.4%）	0（0.0%）
非ASD群（N＝168）	12（7.1%）	69（41.1%）	19（11.3%）	58（34.5%）	9（5.4%）	1（0.6%）

*p<.05 **p<.01

表２　ASDの有無ごとの自己理解

	できている	おおよそできている	どちらともいえない	あまりできていない	できていない	その他
ASD群（N＝158）	2（1.3%）	42（26.6%）	34（21.5%）	56（35.4%）	**24（15.2%）	0（0.0%）
非ASD群（N＝166）	3（1.8%）	43（25.9%）	41（24.7%）	68（41.0%）	**9（5.4%）	2（1.2%）

*p<.05 **p<.01

表３　ASDの有無ごとの障害特性の影響

	与えている	少し与えている	どちらともいえない	あまり与えていない	与えていない	その他
ASD群（N＝160）	**65（40.6%）	52（32.5%）	**36（22.5%）	6（3.8%）	1（0.6%）	0（0.0%）
非ASD群（N＝164）	**29（17.7%）	61（37.2%）	**60（36.6%）	13（7.9%）	1（0.6%）	0（0.0%）

*p<.05 **p<.01

４．１　援助要請について

援助要請が「できる」「時々できる」生徒の合計は47.1%，援助要請が「あまりできない」「できない」生徒の合計は43.4%であり，それぞれ同程度いることが明らかとなった。このことから，過剰適応を示す生徒には，援助要請が良好なタイプと，援助要請に困難を抱えているタイプがいると考えられ，そのタイプによって周囲の対応も異なることが想定される。

援助要請に困難を抱えているタイプは，周囲が本人の困っている状況に気が付きにくいことから，周囲からのサポートを受けにくくなることが考えられる。横田・千田・岡田（2011）[8]は，「過剰適応を生じさせないためには，学童期あたりから『無理しすぎない』『HELPを出す』などできるように支援していくこと」が望まれると述べており，過剰適応を予防するためにも援助要請スキル獲得を目指した指導が重要となるだろう。それに加え，援助要請を生徒が行いやすい環境をつくることや周囲が本人の頑張りすぎに目を配ることも必要であると考えられる。

一方で，援助要請が良好なタイプは，困った状況において周囲からのサポートを受けやすくなることが考えられるが，それにもかかわらず過剰適応が起こってしまう理由については，今後さらに詳細に検討する必要がある。

なお，自閉スペクトラム症の有無による違いはみられなかったことから，援助要請は自閉スペクトラム症の有無にかかわらず個人の学習経験や実際に援助要請を行った際肯定的なフィードバックを受けることができるか等が関係している可能性が考えられた。本研究において，援助要請が良好なタイプと援助要請が困難なタイプの過剰適応の重篤さや将来的なメンタルヘルス不調への影響などについては明らかにできなかったため，今後検討していく必要がある。

４．２　自己理解について

自己理解が「あまりできていない」「できていない」生徒の合計が48.5%となり，約半数の生徒は自分ができる範囲やストレス状態などを理解することの難しさゆえに過剰適応が起こる可能性が示唆された。自閉スペクトラム症の有無で比較すると，「できていない」との回答に有意な差がみられ，自閉スペクトラム症のある生徒に自己理解の課題が特に生じやすい可能性が示唆された。なお，本調査において過剰適応を示す生徒の約半数は知的障害が軽度であったことから，学校内では比較的理解力が高く，活躍する姿が多いことが推測される。そのため，周囲も本人の力を過大評価してしまったり，要求水準を高くしてしまう可能性も考えられ，自己理解においては他者評価の与える影響もあるかもしれない。

一方で，自己理解が「できている」「おおよそできている」生徒の合計は27.7%であり，自己理解に課題はないが過剰適応をおこす生徒も一定数いることが明らかになった。自分ができる範囲や自分のその時のストレス状態などを理解しつつも，目標を達成したい，周囲からの期待に応えたいといった生徒の思いが強いことも背景にあるだろう。本人の気持ちを尊重しつつ，過剰適応が負担にならないよう周囲がサポートする必要があると考えられる。

表４　障害特性の具体的内容

大カテゴリー	中カテゴリー	小カテゴリー	
ASD特性 156（48.8%）	固執 87（27.2%）	こだわり	63（19.7%）
		極端な思考	19（5.9%）
		想像力の制約	5（1.6%）
	対人・コミュニケーション 43（13.4%）	他者の言語・非言語表現の理解の困難	16（5.0%）
		言語表現・コミュニケーションの制約	16（5.0%）
		対人関係の制約	11（3.4%）
	感覚・情緒 26（8.1%）	感情コントロールの困難	17（5.3%）
		新奇場面への適応の困難	4（1.3%）
		刺激への過敏さ	3（0.9%）
		フラッシュバック	2（0.6%）
ASD副次的・関連的特性 116（36.3%）	適応機能（概念的） 44（13.8%）	メタ認知・自己理解の制約	25（7.8%）
		理解能力の制約	10（3.1%）
		状況把握の困難	4（1.3%）
		記憶の制約	2（0.6%）
		論理的思考・判断の制約	2（0.6%）
		般化の困難	1（0.3%）
	二次的問題 36（11.3%）	自信・自尊心の低下	19（5.9%）
		失敗経験・ネガティヴな記憶	13（4.1%）
		精神疾患	3（0.9%）
		過去のいじめ	1（0.3%）
	実行機能 29（9.1%）	見通しが持てない	12（3.8%）
		衝動性	7（2.2%）
		切り替えの困難	5（1.6%）
		実行機能（全般）	4（1.3%）
		注意持続の困難	1（0.3%）
	行動 7（2.2%）	ふさぎこむ・固まる	3（0.9%）
		回避行動ができない	2（0.6%）
		逃避	2（0.6%）
その他の特性 48（15.0%）	性格や気質・機能 33（10.3%）	他者比較・他者評価への敏感さ	12（3.8%）
		承認欲求の強さ	10（3.1%）
		周囲に合わせやすい	6（1.9%）
		他者依存性	2（0.6%）
		サービス精神旺盛な性格	2（0.6%）
		運動機能の制約	1（0.3%）
	環境 15（4.7%）	家庭環境	9（2.8%）
		生活範囲の狭さ・経験の少なさ	4（1.3%）
		本人に対する周囲の認識	2（0.6%）

表５　ASDの有無ごとの過剰適応を生起させる心理

	理想の自分や達成目標	できないこと・失敗	サービス精神	求められることへの敏感さ	評価されることへの敏感さ	褒美	その他
ASD（N = 161）	82（50.9%）	**106（65.8%）	40（24.8%）	59（36.6%）	*76（47.2%）	7（4.3%）	25（15.5%）
非ASD（N = 169）	74（43.8%）	**79（46.7%）	55（32.5%）	75（44.4%）	*98（58.0%）	5（3.0%）	16（9.5%）

*p<.05　**p<.01

４．３　障害特性の影響について

生徒の過剰適応について，障害特性が「影響を与えている」「影響を少し与えている」と回答した教員の合計は63.9%であった。また，自閉スペクトラム症の有無で比較すると，「影響を与えている」との回答は自閉スペクトラム症のある生徒に有意に多く，「どちらともいえない」との回答は自閉スペクトラム症のない生徒に有意に多かった。このことから，特に自閉スペクトラム症の特性が過剰適応において影響を与えやすい可能性が考えられた。

具体的な障害特性の内容として，最も多く挙がったのは『ASD特性』に含まれる「固執」であった。先に挙げた臨床事例の報告と一致し，完璧にこなさなければならない，ルールに完全に従わなくてはならない等といったこだわりから過剰適応が生じやすいことが本研究においても明らかになった。また，『ASD特性』の中では，「対

人・コミュニケーション」における困難も多く挙がった。他者の言語的・非言語的な表現の意図や意味を理解することの困難故に，言葉通りに受け取ったり背景にある意味を誤解したまま，無理に他者へ合わせてしまうこと等が考えられる。また，『ASD副次的・関連的特性』に含まれる「適応機能（概念的）」に関する記述も多く挙がった。このカテゴリーは知的障害の特性に関連する部分も大きく，メタ認知・自己理解の制約や理解能力などの困難により，本人も気が付かないままに過剰適応が生じている可能性が示された。また，自閉スペクトラム症の有無で中カテゴリーの記述数を比較した結果，自閉スペクトラム症の生徒は「固執」，自閉スペクトラム症でない生徒は「適応機能（概念的）」の記述数が最も多く，過剰適応に影響しやすい特性が自閉スペクトラム症の有無で異なることが示唆された。

一方，障害特性が「影響をあまり与えていない」「影響を与えていない」の合計は6.5%とほとんどいなかったものの，「どちらともいえない」と回答した教員は29.6%と少なくなかったことから，障害特性が過剰適応に影響を与えているのか断定しにくい生徒も比較的存在することが考えられた。特に，自閉スペクトラム症の過剰適応の臨床事例では，受身型の対人パターンであることが多いとの考察がなされている報告が複数あることなどからも（杉山・高橋，1994や横田・千田・岡田，2011）[5) 8)]，個人の性質や性格的な側面との鑑別が難しいことも考えられる。

４．４　過剰適応を生起させる心理について

最も回答数が多かった項目が「できないこと・失敗に対して強い負の印象を持ち，それらを許さない」56.1%であった。過剰適応を示す生徒の半数以上ができないことや失敗を気にして過剰適応を起こしていることから，背景には失敗経験の多さ・劣等感などもあるかもしれない。また，「他者から認めてもらいたいという気持ちがある（他者から評価されることへの敏感さ）」も回答者が半数を超えた。学校生活の中で生じるフォーマルな評価に加え，周囲が無意識に発信してしまう評価についても生徒は敏感に感じ取り，過剰適応につながっている可能性も考えられる。また，上記二つの項目については，自閉スペクトラム症の有無で違いがみられた。「できないこと・失敗に対して強い負の印象を持ち，それらを許さない」が自閉スペクトラム症のある生徒に特に多く，「他者から認めてもらいたいという気持ちがある（他者から評価されることへの敏感さ）」が自閉スペクトラム症のない生徒に多く挙がった。

「理想の自分や達成目標を高く持ち，こだわってしまう」や「他者からの期待にこたえたい，または他者から期待されていると思い込む気持ちが強い（他者から求められることへの敏感さ）」も回答者は比較的多かったが，それ以上に，できないことや他者からの評価といった，どちらかというとネガティブな心理が過剰適応につながりやすいことが考えられた。

４．５　今後の課題

最後に本研究における課題を三点述べる。一点目は，本研究は教員に対して調査を行った結果であり，あくまで第三者からみた客観的な過剰適応にとどまる点である。過剰適応は本人の内的適応の状態を考慮する必要があることから，本来ならば生徒本人に対して調査を行うことで，本人の内的な体験を含めた過剰適応の理解が可能となると考えられる。ただし，生徒本人に対する調査においては，知的障害による理解・表現の制約等に配慮した方法が必要になると考えられ，今後具体的な研究方法を検討していくことが必要となる。二点目は，本研究では，過剰適応を示す生徒における全体的な傾向のみしか示すことができず，仮定した各要因と過剰適応の程度（過剰適応の強さや頻度など）との相関や因果関係については明らかになっていない点である。今後は過剰適応とその要因の関連についてより詳細に検討し，メカニズムを明らかにすることが求められる。三点目は，環境要因について検討していない点である。過剰適応は個人と環境との相互作用によっておこると考えられる。したがって，例えば保護者や教員といった生徒にとっての重要他者との関係性や在籍する学級の風土等といった環境要因についても検討していくことで，より多角的に過剰適応を捉えていくことが望まれるだろう。

文献

1）石津憲一郎（2006）過剰適応尺度作成の試み，日本カウンセリング学会第39回大会発表論文集，137

2）菅野敦（2005）退行を示した青年期・成人期知的障害者に対する地域生活支援と社会参加の促進に関する研究―退行の類型と予防―，発達障害支援システム学研究，第４巻 第１・２号合併号，pp.35−46

3）桑山久仁子（2003）外界への過剰適応に関する一考察：欲求不満場面における感情表現の仕方を手がかりにして 京都大学大学院教育学研究科紀要，49，pp.481−493

4）西郷俊介・橋本創一（2014）知的・発達障害者における20代を中心とした退行による支援ニーズ：障害福祉サービスを対象とした調査結果から 東京学芸

大学教育実践研究支援センター紀要，10，pp33-42
5） 杉山登志郎・高橋脩（1994）就労に挫折した自閉症青年の臨床的検討，発達障害研究，第16巻，第3号，pp.198-207
6） 千田若菜・岡田智（2021）自閉スペクトラム症における過剰適応とカモフラージュの臨床的意義，子ども発達臨床研究（15），pp.57-66
7） 横田圭司・千田若菜・飯利千恵子・斉藤由美（2018）知的障害と発達障害をめぐるトランジション，児童青年精神医学とその近接領域，59（5），pp.566-576
8） 横田圭司・千田若菜・岡田智（2011）発達障害における精神科的な問題―境界知能から最重度知的障害の91ケースを通して―，日本文化科学社
9） 米田衆介（2011）アスペルガーの人はなぜ生きづらいのか？大人の発達障害を考える，講談社